

# 全教栃木 教育新聞

## 臨時・非常勤教職員の 待遇改善と要求実現をめざして

### 教員採用試験学習会を実施しました

全栃木教職員組合は2月8日、教員採用試験学習会を宇都宮市文化会館で開催しました。朝から雪が降る悪天候の日となりましたが、県内各地から約40名の臨時・非常勤教員が参加しました。

採用試験、特に作文対策については、宇都宮大学准教授が解説を行ってくれました。大学生の作文指導を通じて、指導する前の作文と、指導を受けた後の作文を読み比べ、指導後の作文は課題に対して的確に答えていること、また自分の取り組みもうとしていることが具体的に書かれるようになったと解説され、参加者には適切なアドバイスになりました。

合格者の体験談として、県南の中学校に勤務する男性が、この4月に採用されるまでの「変歴」を披露されました。臨時採用として勤務してきた中で、保護者への対応の仕方を学べた出身地の中学校での勤務、「私のもとでしっかり働いたらこの学校でも通用する」と言われた校長の下での2年間の勤務を経て、学級経営や生徒指導などについての経験も積めたことが、教員としての力量を高めることにつながったと話しました。

採用試験対策については、過去の問題を徹底的に復習すること、そのために問題は毎年県の文書学事課から送ってもらったことなども紹介しました。

もう一人は千葉県の正規採用教員。この4月から栃木県で働くために採用試験を受験し、合格した小学校教諭の女性です。千葉では私たちと同じ全日本教職員組合加盟の全教千葉教職員組合の組合員です。

体験談では実際に二次面接で出された課題について、参加者にも質問。このような課題に対して、さまざまな角度から考えて、対応することが大切で、そのためにも普段からさまざまな状況を想定して、教育活動を行うことが大切と話しました。

また教師としての力量を高めるために、教育研究サークルで活動していること、このサークルや組合、あるいは職場の仲間と学び合うことに加え、楽しい企画も行っていることも紹介しました。

参加者の感想を紹介します。  
○合格者の体験談を聞くことができよかったです。私も「経験」をたくさんして、面接や子どもたちへ話すネタにしていきたいと思いました。論文は私も苦手なので、どんどん書いて慣れていきたいです。(小学校・女性)

全栃木教職員組合

〒321-0138 宇都宮市兵庫塚3-10-30 TEL 028-653-0353 FAX 028-653-1579

http://www.zenkyotcg.org E-mail info@zenkyotcg.org



あいさつをする篠原章彦執行委員長

○作文の書き方など改めて学ぶことがで

きました。実現性に欠ける文や無駄な言葉を使わずコンパクトにまとめるなど、字数制限のある中で自分の考えを書けるよう練習していきたいと思いました。また、体験談では「教師としてどうあるべきか」という姿勢も考えることもできました。とても勉強になり、採用試験に向けて今日からがんばろうと思いました。

(中学校・女性)

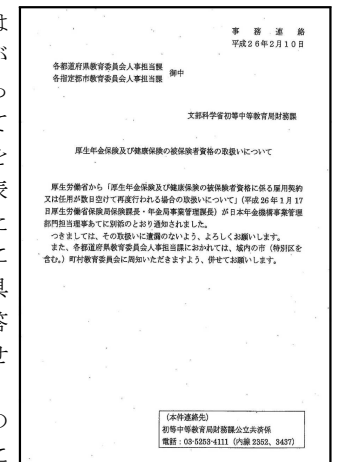
○合格者の体験談はとても参考になった。資料には実際の試験内容などが詳しく書かれていてとてもよかった。短時間ではあったが、とても内容の詰まった話だった。(小学校・男性)

## 「空白の1日」問題の解決を求めて、 宇都宮西年金事務所と県教育委員会に要請しました

3月31日が勤務の空白となる臨時採用教員。これによって、社会保険・厚生年金から国民健康保険・国民年金への切り替えを求められています。手続きの煩雑さなど、この問題を解決するよう、私たちは県教委との交渉でも要求してきました。

厚生労働省は1月17日に実質的に勤務が継続している場合は、社会保険・厚生年金加入も継続させて良い旨の文書が発出されました。私たちは、このことを受け、2月13日に県を管轄する宇都宮西年金事務所に、厚生労働省の文書に基づいて問題を解決するよう、県教委に指導を行うよう求めました。同日県教委に対しても要請を行いました。

県教委は右の文書が文科省から届けられていることを私たちに表明しましたが、解決に向けての具体的な回答はありませんでした。今後もこの問題解決に向け、交渉等で強く要求していきます。



## 加盟各組織の取り組みにも学んで… 全日本教職員組合第31回大会を東京で開催



各組織の取り組みを述べる大会代議員

全日本教職員組合は2月15日、16日の2日間、第31回定期大会を東京星陵会館で開催しました。前夜から大雪となった悪天候でしたが、本部提案の運動方針を踏まえて、各組織からの取り組みの報告や教訓などが交流された、意義深い大会となりました。

福島県立高教組と全教滋賀からの報告を紹介します。

### 本校舎で過ごすことなく卒業…

報告する前に被災地に対しての支援に対しお礼を申し上げたい。私は原発から7.5km離れたところに自宅がある。帰りたいが帰るのはあきらめた。

東日本大震災当時、原発から3.5km離れた双葉高校に勤務していた。地震が起きたときはテニス部を指導していた。テニスコートは原発から2.8kmしか離

れていない。少なくない生徒が被曝してしまった。

原発から20km圏内が再編になった。一時帰宅には浪江町の許可が必要。それは被曝線量が高くなるからで、月1回しか認められない。3月21日にはお墓参りに行く。

「町にもどる」と回答した町民は2割だが、去年は4割だった。「町にもどらない」と回答した町民は3割で、復興に向けて働いている役場の職員も達成感がない。先が見えなくて疲れ切っている。早期退職者も増えている。

学校のある双葉町はもっとひどい。7割が戻らない。残った3割の町民で復興できるのか。

いつになったら帰れるか見通しが立たない。関連死が増えた。5600人が避難先で亡くなっている。

震災後サテライト校に1年にいた。着の身着のまま、教科書、鉛筆一本持たずに逃げた。教材はコピーして授業した。仮の校舎、プレハブ校舎で活動をした。借り物の校舎、プレハブ校舎で生徒たちは卒業していく。双葉高校の生徒が自分の校舎で生活することなく、卒業した。

震災当時子どもたちが避難した地域に風が吹いてきた。大量被曝したことを町長は大変心配をしている。絶対安全な原発はない。私たちは絶対安全だといわれて暮らしてきた。安全なら安全という必要はない。安全といわれてだまされてきた。こんな事故は二度と起こしてほしくない。

## 県教育長の方針に 市町教育長、校長会が異議申し立て

8月に全国学力テストの確定結果が公表されて以後、学テ対策の「嵐」が吹いた。吹いたというより、吹かしたのはだれか、それは県教育長である。滋賀県の結果が47都道府県中46位となり、これを教育長はカンカンになって怒り、総合教育センターと連携していろいろな取り組みを始めた。

9月の1週目に県内すべての小学校長を集め、次の4つのことを言った。問題の分析をしっかりとやれ、すべての教師が問題を解け、小5・中2の児童生徒に前年度の問題を解かせろ、学力向上策を立てろと校長を説教した。そして4つのことを行ったかどうか報告も求めた。

地教委はこの指示に対し、はじめは柔軟な対応をしていた。組合との交渉でも学校に報告は求めないと回答していた。ところが教務主任も2回集められ、ここでも県教育長が先の4つのことを力説した。地教委も従わざるを得なくなり、「申

し訳ないけれどやってほしい」ということになった。

勤務校では5年生に対しテストをやることになった。テストは2学期末までに行えということだったが、進度の都合で2月に実施した。子どもたちは学級閉鎖直後で全員がそろわず、学習も進んでいないのでA問題だけ行った。これでもやったこととして報告した。この報告でOKだった。県教育長が知りたいのは、指示どおりやったかどうかということ、それだけである。他のことは二の次だった。

これらを通じて問題は三つあると思った。一つ目は点数を上げるという目的で行われていること、二つ目は競争意識をさらにおおること、三つ目は教職員をさらなる多忙化に追い込むことである。

来年度県教委は国語と算数の教科主任に対し6回の研修を行おうとした。これに対し、組合はもちろん校長会、市町教育長が反論した。教育長の指示に対し、直接異議申し立てをしたのは前例がないと思う。現場はまともなのに、一人県教育長が怒っているのである。この申し立てによって、研修は3回になった。

## ゆきとどいた教育を求める署名 3971筆を県教委に提出



署名を提出する篠原執行委員長（左）と署名を受け取る大橋芳樹教職員課長

全栃木教職員組合は13日、県知事・県教育委員会宛の「ゆきとどいた教育を求める全国署名」3971筆を県教育委員会に提出しました。この署名については、県内のすべての公立学校PTA会長に協力を要請しています。

国宛の署名は3998筆を集約しています。

教え子を再び戦場に送るな